

県立武道館の思い出と 「柔道」「武道」の心を日常生活で生かす



山下 泰裕 (やました やすひろ)

東海大学体育学部教授

NPO法人柔道教育ソリダリティー理事長

神奈川県体育協会会長

神奈川県立武道館の思い出

神奈川県立武道館の思い出と言いますと、開館式で当時知事をされていた長洲知事といっしょに乱取りをしたことです。これが非常に思い出に残っています。

長洲知事は、柔道をかなりやられていまして、私（当時は現役の選手で世界チャンピオン）と組んで、長洲知事が私を小内刈りで投げました。みんなは、やっぱり体は大きいけど山下さんは身のこなしが良くてうまく投げられてあげたなと思っていました。私は投げられてあげよう、投げられようと思っていましたが、予期しないところで絶妙のタイミングで投げられました。投げられて思ったことは、長洲知事は柔道をかなりやられてきたということでした。次に思ったことは、それなら私が投げても心配ないと思って、私が投げました。私が長洲知事を投げたので周りはびっくりしていました。けれども、長洲知事は、ぜんぜん何事も無かったように綺麗に受け身をされていました。

翌日の神奈川新聞には、長洲知事の技で私が見事に投げられている瞬間、そしてその審判をしてくださった東海大学創設者松前重義先生（柔道をかなりやられていました）が、見ておられて投げる方も投げられる方も審判も3人が笑顔でした。というのが非常に印象に残っています。終わったあと、県庁の方が「山下君、君が長洲知事を投げるからびっくりしたよ」と言われて、「いや問題ないですよ。私は投げられた瞬間に、長洲知事の柔道の腕前はかなりのものだと思ったから安心して技を掛けたのです」と言いました。やっぱりそれが最初の思い出です。その後、いろいろな柔道の大会を何回か見に行きました。あの時の投げられる瞬間の表情の写真が、新聞に載ったのは今でもはっきり覚えています。

『柔道ルネッサンス』について

私は、小さい頃暴れん坊でした。体も大きくて暴れん坊でエネルギーの発散の仕方が悪いもので周りに迷惑をかけて、両親が柔道でもやらせれば少しは人に迷惑をかけなくなるのではないかと思い、そういうことがきっかけで柔道を始めました。柔道のおかげであるいはすばらしい指導者に出会ったおかげで、柔道を通して私自身が変わっていきました。私は、『柔道』あるいは『武道』というものは人づくりだ。人間教育のひとつだと思っています。また、そういうふうな指導を受けてきました。

現役を辞めて全日本チームの監督をしていて、非常に日本の柔道界で気になりだしたことがあります。それは、勝ち負けだけにこだわって柔道人のモラルとマナーが非常に低下してきたことです。

これはあくまでも推測ですけども、東京オリンピック以降、オリンピックや世界選手権で日本の国民の多くは、柔道は日本で生まれたから日本が勝つのがあたりまえだと思っています。でも、今現

在 195 カ国の国や地域が国際柔道連盟に加盟しています。そういうところで勝っていくことは、結果として力を発揮出来なかったり、相手も強かったりしてなかなか簡単なことではありません。

オリンピックや世界選手権で、国民のあるいはマスコミの期待にこたえる成績が出せなかったりしてマスコミ等にたたかれる。だから、いつも「勝たなければいかん。勝たなければいかん。結果をだせ」と言われて、だんだん本来の姿からやや逸脱して勝ち負けだけを求めてマナーが悪くなっていく、そういう現象が日本の柔道界で見られ始めました。私は、2000年のシドニーオリンピックまで全日本チームの監督をしていました。その間、私は非常にそこに危惧を覚えていました。

2001年に日本の柔道界で新たな動きが興り始めました。「柔道は勝ち負けだけじゃない。創設者嘉納治五郎先生が目指したものは柔道での人づくりだ。もう一回、柔道の理想の原点に帰ろう」そして「柔道ルネッサンス」という運動が起き上がりました。立ち上げることが決まって、その委員長に私が指名されました。人選も含めてです。

我々は、柔道を通した人づくり人間教育とした視点を忘れたら、柔道は「柔道」で武道は「武道」でなくなると思っています。その決定に対しては、大変意を強くして、それからずっと6年間、この運動の先頭に立って大勢の人の中心に立って活動して来ました。柔道人の中には、前々から人づくりの柔道を大事にしてこられた人もかなりおられて、結果として多くの人の賛同を得て多くの選手や指導者が、柔道は勝ち負けだけじゃない人づくりだということをいろいろな場で話すようになりました。

ちなみに、日本の柔道界の中で神奈川県の柔道連盟は、この「柔道ルネッサンス」、柔道を通した人づくり人間教育の運動を最も強力に推進している県のひとつです。

【道】とは何か いじめ防止の視点から

私は子ども達に話をするのですが、柔道の「精神」とは何か。柔道の「道」とは何か。「道」とは何か。これは、道場で培ったものあるいは体得したものを日常生活で生かすから「道」である。人生で生かすから「道」である。

もっとわかりやすく言うと、電車やバスの席に座っていてご年配の方が来られたらバツと立って席を譲る。誰かが重いものを持って歩いていたら「持ちましょうか」と声をかける。車椅子、ベビーカーで坂や階段があったとき「手伝いましょうか」と声をかける。誰かが困っていたらすっと近づいて声をかける。道場で培ったものあるいは体得したものが、生かせればこのような行動がとれるようになると思っています。柔道を通して我々は勇気があるはずです。誰かがいじめられていたら「やめようよ」と言って、それが言いにくかったら、いじめられている子に「誰々君こっちへおいでよ」と、そういうところで生かして初めて【道】なのです。

私が、世界チャンピオン、オリンピックチャンピオン、全日本選手権で9回勝った。それだけでは柔道家として半分なのです。そういったさまざまな経験や体験など柔道で得たものを人生で生かしていけるかどうか、これこそが問われていますし、それを創設者嘉納治五郎先生は目指したのです。強くなることは大事なことで、とことん目標を持って、しっかり打込んで頑張れ、自分に負けるな。でも、あいさつひとつにしても、道場で先生や仲間に挨拶出来ても、家に帰ってあるいは教師、他の先生に出来なかったら価値無いぞ。道場を人生に日常生活で生かすことだ。という話をしています。

実は、昨年の4月から神奈川県の体育協会の会長になりました。ずっとこれまで歴代の知事が務めていました。松沢知事が、こちらにも二回程足を運ばれて自分に代わって就任して欲しいということでした。松沢知事は、スポーツマンでスポーツの大切さや価値をすごくわかっておられます。ただ、

知事という職務の中では、実際にほとんど仕事が出来ないということで、私にお願いしたいということだと思いました。

今、いろいろな活動を展開していますけれども、そのひとつが、今、社会的な大きな問題となっている「弱いものいじめ」です。これに対して、我々神奈川県在住のスポーツマン・スポーツウーマンが果たせる役割があるのではないか、やれることがあるのではないかと考えています。現状はあまりにも悲惨です。

理事会でも評議委員会でも大きな賛同を得て、5月23日には、神奈川県の各団体の代表者の方々に集まっていただいて緊急集会を開き、これから「いじめ防止」を力強く推進していくことになりました。

日本では、スポーツも学校教育から始まって入っていくものが多いですから教育の一環という考え方が強いです。スポーツで大切なことは「フェアプレーの精神」「スポーツマンシップ」です。いろいろな協会の方々や代表者の方々をお願いをしました。

柔道では武道では、そこでその道場で得たものを日常生活で生かすことが大事だと思っています。グラウンドやコートでの「フェアプレー」「スポーツマンシップ」これが大事です。それを日常生活で発揮して、例えば、ある教室で子どもがいじめられていたらパッと入ってサッカー少年が「やめようよ」、そこへテニスをやっている女の子が入ってきて「やめましょうよ」、そこへバスケットをやっている子どもが入ってきていじめられている子どもに「誰々君こっちへおいでよ」などと言えるようになったら雰囲気は変わると思っています。

神奈川県は素晴らしい県で、そういう提案に対して多くの人やスポーツ関係者が賛同してくれます。そしてこれからはその運動が進んで行くと思っています。是非、この神奈川の武道を愛する人、実践している人、武道の発展を願う人、真っ先に我々と一緒になってこの「道」とは何か。それを日常生活で実践して行って欲しいです。

スポーツでは武道では、まず一番大事なことは相手を尊敬することです。戦う相手は敵ではない、相手がいるから強くなれる。そして、もうひとつ大事なことはそれを日常生活で生かすことです。武道を通して丈夫な体、素晴らしい技術、たくましい精神力、そして日本の心を学ぶ。それを通してながら得たものを、是非、実社会の中で実践して行って欲しいと思っています。

中学時代、私が柔道を教わった先生で白石礼介という素晴らしい先生が、我々にいつも言われたことは「柔道のチャンピオンになることも大事だよ。だけど、もっともっと大事なことは人生の勝利者になることだ」と言われました。みんなが柔道を通して相手を思いやる。力を合わせる。ルールを守る。目標に向かって頑張る。投げられてもくじけないで立ち上がっていく。そういうことを学んだら人生の財産になっていくような気がします。

是非、より多くの人達と各武道の連盟の方々に武道の普及振興と発展に、さらにご尽力していただいて、そしていろいろな武道が協力し合って技や体をみがくだけではなく、それを実社会の中で実践して行って欲しいと思っています。

武道を通しての国際交流

ここ4、5年、年間100日以上海外に行っています。国際柔道連盟の仕事で、あるいは外務省や国際交流基金から依頼されて武道を通じた他の国との交流ということで海外へ出ることがあります。まだまだ、世界の中で日本は正しく認識されていない部分があります。興味関心が低いところもあります。でも、世界の国々で武道は広く普及してきています。

例えば、柔道の「礼」です。礼というのは頭を下げることです。頭を下げるということは、欧米の国々から見るとお詫びすることなのです。何で柔道は始めと終わりにお詫びしなければならないのか。最初はそう思います。イスラムの国は、アラーの神以外には頭を下げません。礼をしても頭だけ下げないのです。けれども、一生懸命柔道に打込んでいくうちに、だんだん頭を下げるということはお詫びすることとは違う。アラーの神の前にひれふすことと柔道の相手を尊敬する礼は違う。これは日本式の相手に対しての敬意や尊敬を表していることなのだ。柔道は相手をやっつけることではなく、相手がいるから自分の身が高められる。このように、相手に対する敬意や尊敬が大事なことだとわかると、イスラムの人達も欧米の人達も率先してしっかりと礼をします。

武道では、裸足で畳や板張りの上に立ちます。そして日本式の礼をします。柔道衣、剣道衣、合気道衣いろいろな着物を着て、そこで使う言葉は日本語です。そうすると外国人が、着物を着て日本式の畳や板張りの上で裸足になって（欧米の人は裸足になることに抵抗があります）日本式の礼をする。それだけで、日本の伝統文化の体験です。

国内においても、世界においても、武道がもっともっと普及して広がること正しく広がっていくことが、日本にとっての国益にかなっていくのではないかと考えています。どうも日本人は、はずかしがりやで仲間だけあるいは仲間内と若干閉鎖的なところがありますが、武道に携わっている方々が、外国で武道をやっている人達を同じ仲間として心よく迎えて、武道を通しての国際交流を今25周年、これから50周年に向けて大きく展開していけたら、展開していったらいいと思っています。

これからの武道について

今、このような時代だから、子ども達や少年少女に武道を通して相手を尊敬する心、相手の痛みがわかる心、そして日本の心を伝えていくために、武道体験は非常に大事なことではないかと考えています。

そういうことを伝えていくためにも、我々武道人が襟を正して立派なことを言うよりも、武道人の後ろ姿を見て「やっぱり武道をやっている人は違いますね」と評価されるような、そんな武道人になっていかなければならないと思っています。

柔道、剣道、空手道、合気道、相撲道いろいろあります。いろいろな違いがあります。違いがあるからいいのです。違いを認めながら、違ったその他のスポーツのいいところや他の武道のいいところを認め合いながら、この神奈川の各武道団体が一緒に力を携えてやっていると、私はいろいろな意味で社会に貢献していけるのではないかと考えています。

これから、我々は生涯スポーツとしての柔道を大事にしていかなければならないと思っています。心身共に子どもだけではなく大人も不健康な日本人が多くなってきています。だから、初心者の人にもやさしい武道として神奈川県民の活力のために発展のために、是非、県立武道館を有効に活用していただいて、各武道団体に底辺の拡大・普及に力を入れていって欲しいと思っています。

談 山下泰裕

文選・編集 神奈川県立武道館